

日本で働く韓国の大学卒業者のキャリア形成に関する 一考察

神野未翔子*
bpfp204@hotmail.co.jp

石丸春奈**
ishimariharu@gmail.com

<目次>

- | | |
|--------------------------|----------------------------------|
| 1. はじめに | 3.2.1 「小さい世界」からの脱出、ワーキングホリデーで日本へ |
| 2. 研究方法と調査概要 | 3.2.2 社会人としての意識の変化 |
| 3. 事例研究 | 4. 考察 |
| 3.1 ケース1 Jさんの語り | 4.1 Jさんの語りから見えるもの |
| 3.1.1 挫折からの葛藤、自分の強みを生かして | 4.2 Bさんの語りから見えるもの |
| 3.1.2 技術の向上、理想のリーダー像に向けて | 4.3 二人の語りから見える韓国の大学における就職指導の可能性 |
| 3.2 ケース2 Bさんの語り | 5. 今後の課題 |

主題語: 韓国の大学卒業者(students who graduated from Korean universities), 就職活動(Job hunting), 日本就職(Work in Japan), キャリア形成 (Career development), ライフストーリー(Life story)

1. はじめに

現在、韓国の大学を卒業し、日本で就職する韓国人が増えている。法務省のデータによると、就業ビザのうち、会社員や技術者として企業で働く際に必要となる、技術・人文知識・国際業務の在留資格を取得した韓国人は、2018年は24,602人であった。5年前の10,100人と比べると約2倍以上となっており、年々増加の一途を辿っている¹⁾。また、2019年5

* 前 江原大学校 日本語学科 招聘教授

** 社会福祉法人大和清寿会 HAYAMA International Language School 日本語講師

1) 法務省ホームページ「国籍・地域別在留資格(在留目的)別在留外国人」によると、2013年10、100人、2014年10、345人、2015年16、669人、2016年18、936人、2017年21、603人であった。(全て12月の調査結果)

月にソウルで行われた海外就職博覧会では、日本企業は最も多い115社が参加し²⁾、日本企業が韓国人大学生の採用を積極的に考えていることがわかる。

今後さらに多様になるであろう日本で就職に至るまでの経緯を知る上で、韓国の大学生が何をきっかけに日本での就職を目指し始め、就職活動をどう行っているのか、就職後のキャリア³⁾プランをどのように考えているか、といった個々の心理的側面にも目を向ける必要があると考えられる。外国人大学生のキャリア意識について、中山・佐藤(2014)では、中国人女子学部留学生2名の日本での大学生活から将来像に至るまでの自己の関心に注目し、将来像の形成過程を追っている。留学生は進路を選択する際に、周囲の望む「自己」、キャリアを望む「自己」など、たくさんの将来像をもった「自己」が葛藤を起こす中で、調整を付けながら将来の選択をしていると述べている。この自己の葛藤に対して、大学で何ができるのかについて問いを投げかけている。また、久野(2015)では、中国人編入留学生の大学生活から進路選択に至るまでの成長要因を縦断的に調査している。就職活動期、留学生は不安や恐怖心が募り、当初は就職活動において具体的な行動に移せずにいたが、その気持ちを打破するためにインターンシップなどの行動を起こし、コミュニティを広げ、またそのコミュニティに支えられ、困難を乗り越えていった。進路を決定する要因は重層的で複雑であり、日本に留学した外国人が、日本という場所で様々なコミュニティと出会い、支えられている様子が見える。三代(2016)では、日本国内の企業に就職した21名の元留学生に対して、「グローバル人材」として自己を内面化していくプロセスとそこにある葛藤についてインタビューを行っている。中国人Aさんの場合、就職活動を語る際に、自分の「価値」という言葉をたびたび口にしていたという。この「価値」とは、日本で就職活動を行う際に一般的に行われる自己分析から見えてくるものであり、Aさんも就職活動で自己分析の必要性を感じ、自分の価値を見出そうとしたという。また就職活動を支えた「重要な他者」がいたことも語りから見えてきた。家根橋(2018)では、地方小規模私立大学中国人女子学生のキャリア意識を探索している。あらゆる進路選択の中で「日本に残る」か「母国に帰る」という二項対立の中に視野を狭められていること、日本、母国ともに就職活動を行うことに対する困難を感じていることがわかった。

2) (韓国)聯合ニュース「ソウルできょうから海外就職博覧会 日本企業115社参加」2019年5月31日(最終閲覧日：2019年8月7日)

3) 本稿の「キャリア」は、中央教育審議会(2011)「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」の「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね」(第1章第1節)とし、単に職業だけにとどまらない、他者や社会の中で自らの価値や役割を見出していく過程とする。

これらの研究はライフストーリー研究法を用いたものである。ライフストーリー研究法とは、社会学をはじめ文化人類学、心理学などの領域で行われている質的調査方法である。調査対象者にインタビューを行い、語り手の経験の主観的な意味やアイデンティティなどを重視し、個人的なものを社会的なものに関連づけ解釈する。また、インタビューにおいて語り手はたんなる情報提供者ではなく、聴衆(インタビュアー、世間など)を意識して話すため、インタビュアー(調査者)も調査の重要な対象となる。それゆえ、インタビューの場で語られるライフストーリーは、語り手一人が語るものではなく、語り手とインタビュアーの双方が構築していくと考える。そして、語り手にどんなことを語ってもらいたいのかという、インタビュアーの「一定の構え(志向性)」(以下「構え」とする)も調査の対象となる(桜井2002 : pp.9-31)。

ライフストーリー研究法を用いたキャリア意識に関する上記の研究は、多くが日本の大学に在籍している(していた)留学生を対象としており、日本での生活を通してキャリアを形成する過程を明らかにしているものである。しかし、海外の大学に通う大学生が日本での就職を果たしたケースでは環境や過程が大きく異なるのではないだろうか。

そこで、本稿では、韓国の大学を卒業し、日本で就職を果たした韓国人2名を対象に、日本での就職に至るまでの経緯と、現在の状況、これからのキャリアプランについてインタビューを行った。彼らのライフストーリーから、キャリア形成に影響を与えた経験や考えは何であったかを考察するとともに、韓国の大学でできる就職の支援・指導とは何かを考えたい。

2. 研究方法と調査概要

本研究では、韓国の大学を卒業し、現在日本で働いている韓国人2名を対象にし、生い立ちから遡り、現在に至るまでの経験や考えを語ってもらった。主な内容は①日本(語)との出会い②日本での就職を志望した理由③就職活動時④現在の状況⑤今後のキャリアプランであるが、協力者と比較的自由な会話を心掛け(桜井2002 : p.28)、この他にも自由に語ってもらった。インタビューの詳細は以下の通りである。

協力者 (調査者)	性別	大学	日本滞 在歴	就職後の 日本滞在歴 ⁴⁾	インタビューの日時・所用時間
Jさん (神野)	男	地方国立K大学	なし	約11ヶ月	第1回目 2019年2月16日(48分) 第2回目 2019年2月28日(77分) 第3回目 2019年3月9日(71分)
Bさん (石丸)	女	地方国立J大学	あり	約6か月	第1回目 2018年11月17日(57分) 第2回目 2018年12月9日(45分) 第3回目 2019年2月9日(52分) 第4回目 2019年3月10日(70分) 第5回目 2019年3月17日(63分)

本稿では、協力者が語った内容をライフストーリーと位置づけた。このライフストーリーは、協力者の主観的な考えである。そのため、日本での就職に至るまでの経緯、現在の状況、これからのキャリアプランを彼らの目線で理解するうえで最適だと考え、この研究方法を用いることにした。桜井(2002: pp.24-30)では、ライフストーリー研究法には、①解釈的客観主義アプローチ②対話的構築主義アプローチの二つの立場がある。①は多数の語り手のライフストーリーをとおり、特定の社会的現実を明らかにするものであるのに対し、②は、ライフストーリーをインタビューの場で語り手とインタビュアーの双方の主体が生きることと考え、語り手が何を「いかに語ったのか」に注目するものである。本稿では、②の立場を取った。

語られたライフストーリーは協力者に許可を得て録音し、データ化した。また筆者らの解釈に間違いがないか協力者に確認を行った。

筆者らは2名が日本での就職を果たし、一旦の成功を収めた者たちであり、また彼らの就職活動は順調に進んだであろうという構えを持ってインタビューに臨んだ。協力者のライフストーリーの中で、キャリア形成に関わる経験と、その経験に伴うキャリア意識の変化に注目し、考察を行った。

4) 最後のインタビュー時を基準とする。

3. 事例研究

3.1 ケース1 Jさんの語り

3.1.1 挫折からの葛藤、自分の強みを生かして

ソウル近郊で生まれたJさんは、中学3年生の第二外国語の授業で初めて日本語を学び、そこから日本(語)との関係が生まれる。このころから、日本のサブカルチャーに興味を持ち、日本のドラマや音楽と接するようになった。高校は農業高校の農業流通商業科へ進学し、コンピュータを使った農業流通に関する専門的な知識を学んだ。高校でも第二外国語の授業で1年間、日本語を学んだ。大学受験は農業関係の学科を受験したが、期待通りの結果にならず、地方国立大学の日本語学科に入学する。詳しく日本語の勉強をしたことがなかったのでやってみたいという気持ちが強かった。留学やワーキングホリデーなどで日本にいったらと思う程度で、日本に就職したいという気持ちはこの頃はなかった。大学2年の冬休み、韓国で放送された日本のドキュメンタリー番組を見て京都・奈良の文化財に興味を持ち、実際に1人で日本へ行った。その時の日本の印象についてこう語る。

J: 人たちが全部優しく、誰に質問しても優しく答えてくれて。海外旅行初めてだったんですけど、結構一人でもちゃんとどこにいても問題なかったなあと。

(1回目のインタビュー)

空港に到着した時から韓国と違う雰囲気、期待と不安が募ったという。しかし、わからないことは、日本語を使って道を聞いたりした。その際、誰に質問しても日本人はやさしく答えてくれたという。Jさんが就職し日本に住むまでの唯一の来日経験であったが、この時の日本の印象はよかったことがうかがえる。

大学3年になり、周囲の友人と自分の日本語能力に差を感じ始め、徐々に自分の日本語能力への不安を抱き、焦りを感じていた。日本語の学習に力を入れるようになるが、思うように成績が上がらなかったと自分自身を振り返っている。

大学4年になると、周囲には留学やワーキングホリデーで日本に行ったことがある友人が多くいた。その友人から日本での暮らしや経験したこと、良い影響を受けた話を聞き、ワーキングホリデーのビザを利用して日本に行こうと思い始める。この頃は、日本で就職し

たいというよりも一度は日本で暮らしてみたい、という思いが強かった。

大学4年の最後の学期が終わってすぐ、ワーキングホリデービザを申請する。しかし、落選してしまう。ここからJさんの葛藤が始まる。次のワーキングホリデービザの申請まで待ち再び申し込むか、韓国で就職活動を行うか、Jさんは1か月間悩んだ。そして、ワーキングホリデービザを取得することよりも、どこかに就職したいという気持ちが大きくなっていった。

J：(略)自分でサービス職とかは無理で、(略)営業もサービスと同じだし、普通の事務で私が日本で働くためには、本当に高い日本語レベルじゃないとだめだと思って、少しの日本語とほかの技術とかで自分が持っていたら、日本語のレベルは高い方じゃないけど、仕事はできるんじゃないかなと思って。そのいろんな技術の中で、一応、パソコンの技術が自分によいかなと思ひまして。

*：いつ頃からそれ(日本の就職)を考え始めたか覚えてる？

J：ワーホリを落ちた瞬間です。ほぼ1か月の中で全部決めて、挑戦しようと思いました。

※()は筆者らが補足 (3回目のインタビュー)

自分が持っている能力について「少しの日本語」「パソコンの技術」とであると語っている。パソコンは幼いころから触れ、パソコン関係のアルバイトも長年行ったこと、また大学時代多くのアルバイトをした経験から、自分に向いているのはサービス業よりもデスクに向かう仕事だと気づいたという。しかし、「日本語のレベルは高い方じゃない」と語っているように、日本語能力への不安は拭いきれなかった。日本語能力をカバーできるほどのITの技術がほしいと思うようになる。日本での就職関連の情報を集める中で、日本語とIT技術を同時に学べるIT学校があることを知る。Jさんはそこに入学し、約7か月間通った。そして、5か月目頃から、就職活動を開始する。しかし、その学校が紹介した就職先はすべて落ちてしまう。自分でインターネットで採用を探したり、日本企業の就職博覧会にも参加し、面接を受けていったが、現実は厳しかった。徐々に焦りが出てきた時の心境についてこう語る。

J：(略)これ以外に就職すれば時間もかかるし、私の自信があるものって少しだけの日本語能力と今勉強したITの技術ですから、それ以外にまた他の面接とか受けるのは無理だと思って。一番確率が高いのが、今の状態でIT企業の面接を受けるのが確率が高いなと思って。

(3回目インタビュー)

ここでも自分の能力「日本語」と「IT技術」に関して振り返り、この分野で就職を決めたいと、強く思ったことがうかがえる。なかなかうまくいかない就職活動を支えたのはその自分の「強み」であった。その時に会ったのが現在の会社だったという。

J：あまりいい条件ではなかったんですけど、今の状態でそこまで落ちて、どこでも一応(会社)に入って、自分の経歴を作らないとだめだと思って。ちょっとつらいかもしれないけれど、一応(日本)に行って、自分の経歴を作るために面接をして。自分の能力がないことも社長が知ってたんですけど、社長の話を聞いたら、Jさんだったら大丈夫だと思うと、そういう感じで合格しました。

※()は筆者らが補足 (2回目のインタビュー)

2017年12月、東京のIT企業に内定をもらう。早く社会経験を積みたいという気持ちが大きく、現在の会社に入社することを決めた。Jさんの語りから自分の技術を磨きたいという思いが強く表れている。

3.1.2 技術の向上、理想のリーダー像に向けて

2018年3月正社員として来日。現在はさまざまなプロジェクトのチームに加わり、忙しい毎日を送っており、時には休日を返上して働く日もあるという。現在の日本での仕事に対して、タスクを解決できたり、他者から評価されたときに仕事のやりがいを感じ、仕事内容も自分に合っていると語る。技術があれば仕事が増える。そのためさらにITの勉強に励み、実践を積み重ねなければならない。信頼される技術を持てば、業界にも知人が増え、つながりができ、仕事を依頼されることもあるという。次の語りから、Jさんは自分よりも高いIT技術を持った人と出会い、情報を得、そしてさらなるスキルアップが必要だと考えていることがわかる。

J: 一番重要なものはITのレベルかな。3年までずっとつらい生活が流れると思います。

*: 3年過ぎたら技術が身について。

J: 3年過ぎたらいろんな人と出会うこともありますから。

*: 3年まではがんばろうと思っているんだね。

J: はい。まだ自分ってITのレベルがあまり高くないから、少しでもちゃんとしないとだめだと。

*: この業種でこれからも働こうと思ってるということ？

J: ITの仕事って自分でも結構(自分と)合っていると思いますから、仕事のやり方とかあまり悪くない感じで。

*: 自分に合ってて、満足している部分があるんだね。日本にはこの先も。

J: そうですね。今の感じだったらずっといるかなと思います。

*: (日本の生活が)長くなりそうだね。

J: (日本に)長くいるためには、(IT)技術とか生活について…。ここで結婚とかも考えるんじゃないかと。

※()は筆者らが補足 (3回目のインタビュー)

今後のキャリアプランについて、尋ねたところ、現在の仕事を日本で続けていきたいと考えており、韓国に戻るという選択肢は現在のJさんにはないようである。

今後さらにいい条件の働き口が見つければ転職も考えているという。しかし、前述の語りにもある通り、3年は現在の会社で働こうと思っている。我慢のしどころであるというJさんの語りには、入社2年目に向けて、さらに上を目指したいという思いがうかがえる。

J: 経歴が長くなったら私もリーダーとかそういう立場になる可能性もあるので、そこまでの準備もしないとだめかな。自分はまだ細かく確認とかできなくて、ちょっとミスとか結構あるタイプなので、でもリーダーの立場って、ITの技術より、細かく確認とか そういうことがもっと重要だと。いろんな人たちの結果を見て、ちゃんと覚えていることとか、確認とか。それを全部自分が確認して会議で報告したりするので、そういう今の自分の足りない部分を強くしないとだめかなと。

*: 技術だけの話ではなく。

J: 自分の性格とか。

(3回目のインタビュー)

Jさんは、プロジェクトのチームリーダーになる可能性も視野に入れたうえで、自分の能力を客観視している。現在は、ITの技術に加え、業務遂行能力を備えた理想のリーダー像に近づきたいという思いが読み取れる。

3.2 ケース2 Bさんの語り

3.2.1 「小さい世界」からの脱出、ワーキングホリデーで日本へ

Bさんは小学生の時、ガールスカウトで日本へ行った。それが彼女と日本の最初の接点となる。また中学卒業後にBさんの家族と仲のいい家族に会いに再び日本へ訪れた。この2度の日本訪問で、きれいな街、人的サービスの良さなどから、日本に対していい印象を抱いていたようだ。

高校卒業後、工学と経営に興味があったBさんは、「工学の経営」と呼ばれる産業工学の学科に入学する。当時の夢は韓国の大手企業に就職し、ヒトやモノを管理する仕事をしたいと漠然と思っていたという。

大学では、2年生から卒業まで学内の日本語講座を受講した。受講の理由は、2度の日本旅行でのいい印象があったことと、高校卒業後に親しんだ日本のドラマ、音楽などのサブカルチャーから日本語への関心が高まったからだった。大学3年生の時、学科トップの成績だったBさんは、先生から世界各国の大学生が集まる工学系フォーラムの参加を勧められた。このフォーラムの参加により、彼女は今までの成績優秀で「自分が一番」という考えに変化が生まれることになる。フォーラムでは、進行言語は英語で、各国の大学生達が母語ではない英語を流暢に話していたという。しかし、彼女はその英語を十分理解するには至らず、委縮してしまう。その時のことを次のように語っている。

B：一緒にいた人とか、英語が母国でではない人も、インドの人とかも、みんな英語がベラベラで、私それで受けたくなくなって(略)

*：ほーじゃあ、英語ばかりでつかれたんですね。

B：全然わからないから、私ここになんでいるのとか思ってしまったて。

*：全部英語でやったんですね。それはしんどいね。そのフォーラムで、ワーホリ行こう、なんかしよう、大きい世界(を見てみたいと思いましたか。)

B：そうですね、その時、ああ、私これではだめだと思ったんですね。

※()は筆者らが補足 (3回目のインタビュー)

彼女は単に英語がわからなかったことに「だめだ」と思ったのではない。次の「私よりすごい人がある」という彼女の言葉に表れているように、優れた大学生と自分を比較し、焦りや劣等感から「だめ」という感情が生まれたのであろう。この後、Bさんは日本へワーキングホリデーに行くことになるが、彼女は、ワーキングホリデーに行く前の自分の居場所を「小さい世界」と称している。そこから抜け出し、「大きい世界」を経験したいと語った。彼女にとっての「大きい世界」は日本でのワーキングホリデーだったのである。行き先を日本にした理由は、大学2年生から受講している日本語講座で、どれだけ日本語の能力が身に付いたか確かめなかったからだという。

*：20代でワーホリしておいたほうがいいって思ったのはどうしてですか？

B:(略)私が一番だと思いながら、生活したのに、そこに行ったら私よりすごい人がいっぱいいるので、あー私今まで小さい世界で住んでたんだと思って、

*：うん

B:それが、もっと休学する、休学してワーホリいくのに、ことに、きっかけになったかも。もっと大きい世界を経験してみたいと思いました。

*：そうだったんですね。

B：それが、ワーホリ行く、大きい理由の一つじゃないかなと思います。自分が今までの生活とか、見ていた世界とは全然違う世界がそこにはあるから、それで、まったくちがう生活で学ぶこともあるし。

(3回目のインタビュー)

ワーキングホリデーに行ったことが、彼女にとって人生の「ターニングポイント」となる。次の語りから、ワーキングホリデーでの経験が彼女のキャリアに大きく影響していることがわかる。

B:たぶん、あの時ワーホリに行っていなかったら、いまの人生はまったく別の人生だったかもしれません。ワーホリがなかったら。

*：ふーん、そうですか。今のBさんになるのはワーホリが必要だったんですね。

B:そうですね。休学してワーホリいったことが、一番ターニングポイント。

(3回目のインタビュー)

ワーキングホリデーでBさんは、関東地方の某大学でファーストフード店のアルバイトを始める。そこで彼女は「お母さんみたいな」存在の日本人従業員に出会う。娘のように優しく接してくれる日本人と一緒に働くことで、アルバイトも「大変じゃなかった」と述べている。これまで一人暮らしやアルバイトの経験もなかったBさんにとって、日本人従業員との出会いは心理的に大きな支えになっていたことがわかる。そして、この出会いが日本への就職を決める一つの要因になったと話す。

*：日本に就職しようっていう気持ちに影響したことってありますか。

B：(日本で出会った)人が一番およかったです(大きかったです)。その、バイトをしたところの、一緒にバイトをしていた人たちがお母さんみたいな人だったんですけど、二人が、で、今も、会ってますけどその方と、その方々がほんとに優しく、自分の娘みたいにかわいくしてくれて(かわいがってくれて)、仕事が大変ではなかったし、普通バイトとか仕事は、人で心配するとか、人が大変だからやめようってなるじゃないですか。(略)

B：その人たちがいたから、日本で働くこともありかも、と思いながら。

※()は筆者らが補足 (3回目のインタビュー)

日本での就職に影響に与えたもう一つの要因は、海外で暮らすということが、特別なことではないとわかったことであったという。ワーキングホリデーで期待していたことを尋ねた際、彼女は「全く新しい生活」が始まると思ったが、住んでみると「どこに行っても人が住むのは同じ」と語っている。これは決して否定的な意味ではない。その後の「暮らすことって韓国じゃなくてもいい」という言葉から、韓国以外でも生活できるという自信や安堵感を意味するものであると考えられる。

*：人生のターニングポイント、何がターニング、何が変わりましたか。

B：んーあの一暮らしことって、韓国ではなくてもいいんだとか、考えることができたし、どの国にいても、人が暮らすのは同じとか。

(4回目のインタビュー)

ワーキングホリデーを終え、帰国したBさんは韓国と日本の企業両方を視野に入れ就職準備を始める。韓国企業は日本語を使えるという条件を第一に大手企業に応募した。自己

紹介書の準備、英語(TOEIC)や韓国の歴史の勉強はほとんど一人で取り組んだ。一方、日本企業は、日本での就職に関する情報サイトや学校の就職支援課から情報を収集し、就職博覧会での面接を受けた。2018年9月、Bさんは日本の某大手メーカーに入社する。話の中で就職活動を続けるうちに、徐々に疲弊していくBさんの一面も見えた。彼女はある就職博覧会で、予約した7社の面接のうち、最後の日本企業の面接を疲れたので「受けるのやめよう」と思ったという。幸いにも彼女は友人に励まされ、面接を受け、その会社が現在の職場となる。

3.2.2 社会人としての意識の変化

現在、入社後6か月ほど経ったBさんには、仕事に対する意識の変化が見られた。今どんな仕事をしたいかという質問に、今している仕事は本当にしたい仕事ではないとしながらも、自分に任された仕事にやりがいを見つけることが最も重要だと語った。次の語りから、彼女が責任感を持ち仕事に取り組んでいる姿勢が窺える。

B：う～ん、でも、学校で学んだことを使ってなにかをしたかったんですけど、会社でなにをやるのか、どんな仕事があるのかは、わからないから、学生の時は、でも、私が、なにか今まで学んで勉強したことを生かしてなにか、やりたいなどはなんとなく、思ったんですけど、それは学生の考え方だと思うし、会社入ってからは、それよりも、自分、ん～、私がやりたいことを会社の中にある仕事の中で、私に合う、やりがいを感じる仕事を見つけるのが、今の優先順位、やりたいことは特にないですね。

(5回目のインタビュー)

Bさんは今、目標とする上司がいる。その上司は仕事ができ、社内から頼られる存在だという。これからどんな社会人になりたいかという問いには、自分もその上司のように、仕事と会社に対し責任感を持ち、周りから頼られるような存在になりたいと語った。

B：自分の仕事をきちんとできて、周りの仕事にも、これ私の担当じゃないからしらないよってならず、私のその、私がかっこいいって言った人、あーうー方みたいになりたい。いろんなことを知ってるし、あの人に何かを頼んでも、問題ないよと思うよと言われるようになりたいです。

(5回目のインタビュー)

今後のキャリアプランについて、これからも日本で働くつもりかと聞いたところ、インタビューの時点では帰国を考えていなかった。今はまだ「新人」で学ぶことも多いが、仕事に慣れると、成長を感じられなくなるかもしれない。その時は、韓国も含めた他国に行く可能性もあるだろうと答えた。それと同時に、韓国での就職活動は厳しいものになるであろうという不安も語った。しかし、もし日本で結婚することになれば、長く日本にいたいとも考えているという。

B：今は、新しい環境だから、なんでも新しい。慣れる練習をしているじゃないですけど、それが全部慣れて、新しいものがない、自分の生活に発展がないと思ったら、そうですね、その時は、韓国に帰ることも考えています。でも韓国帰っても大変じゃないですか、仕事、就職活動またやらなきゃならないし、韓国で働きたい気持ちはありますが、その就活がいやで。未来にもそうなるんじゃないかなと思います。

(5回目のインタビュー)

4. 考 察

2名とも現在の状況にも概ね満足していることから、一旦の成功を収めた者たちであるという筆者らの構えは変わらなかった。しかし、就職活動の経緯は決して順調ではないことが分かった。二人の語りから効果的な就職指導につながる糸口を探る。

4.1 Jさんの語りから見えるもの

Jさんは中学時代から日本語の学習を始め、日本のサブカルチャーに親しみ、日本を身近に感じていた。大学は日本語学科に進学し、本格的に日本語を学び始めた。しかし、大学時代、自分の日本語能力に対して自信を持てていなかった。大学卒業後、日本のワーキングホリデービザの取得を考えており、日本で就職したいという強い思いはなかった。しかし、ビザ取得が思うようにいかず、挫折を味わう中で、中学から学んできた「日本語」と得意な「IT技術」という二つの強みを自分で見つけ、「日本での就職」という選択肢が生まれた。また、就職活動が思うように進まなかった際にも、自分の強みを再認していた。挫折がJさ

んを奮い立たせ、自分の「強み」を見つけたことが、キャリア形成につながったと言える。

現在は就職して11か月になるが、3年間は技術を磨きたいと語った。この背景には、周りに高い技術を持った先輩社員が多くいる環境で仕事をし、自分もいずれはリーダーになりたいという気持ちがあることが関係している。ITの技術的な面だけでなく、周りから頼りにされるリーダー像に近づきたいという思いが語りからもわかる。将来なりたい姿を目標に据えながら、日本での経験を積もうとしている様子がうかがえる。

4.2 Bさんの語りから見えるもの

Bさんは小学校時代と中学卒業後の日本訪問の経験から、日本にいい印象を抱き、高校の時には日本のサブカルチャーに触れ、徐々に日本への関心が高まっていった。その関心から、大学では、日本語講座を受講し、日本へワーキングホリデーの場所は自身の日本語能力を確かめたいと思い、日本を選択することになった。

彼女がワーキングホリデーのことを、「人生のターニングポイント」と語ったように、ワーキングホリデーが彼女のキャリアに大きく影響を与えたと考えられる。しかし、筆者らはBさんの転機(ターニングポイント)は工学フォーラムへの参加から始まったのではないかと考えた。桜井(2002 : p236)では、転機は「新しい自己像やアイデンティティ形成にかかわる過程」とし、「それまでのカオスから新しい意味体系を確立していく過程も、転機の視野に入れておく必要がある」とも指摘している。Bさんの場合、それまで優秀だと思っていた自己像が、フォーラムで自分よりも優れている大学生と出会ったことで崩れている。それと同時に自分を成長させたいという思いが芽生え、ワーキングホリデーに行った。そこで、韓国でも日本でも働けるという新しい自己像を形成することができた。

社会人となったBさんは、会社と自分の仕事に対する責任感が芽生えていた。また理想の上司の存在が、彼女の仕事への意欲に大きく影響を与えていることもわかった。

4.3 二人の語りから見える韓国の大学における就職指導の可能性

ここでは、協力者2名の事例において、大学でどのような就職指導が期待されるのかを考えたい。三代(2016)では日本の企業に就職した元留学生が就職活動について語る際、「価値」という言葉をインタビューでたびたび使っていたという。自分の価値を見出し、その価値を最大限に発揮できる就職先を探していた。まさにJさんも自分の「強み(価値)」を見出し、

日本への就職に進んでいった。これらの経緯から、大学でも自己を見つめなおせるような自己分析の時間を十分に取入れたカリキュラムが必要ではないだろうか。近年では韓国国内でも自己分析の重要性を説く実践研究(角・大田2015、古賀2016など)も見られるようになった。だが、韓国の大学卒業者の場合、卒業後に資格取得や語学能力の向上のために時間を費やし、1~2年後に就職するケース、大学在学中に就職先を見つけ、大学に在学したまま働き始める者もいる(安井・宮前、2008)。そのため個々の就職活動期が様々であり、キャリア教育を行う時期も難しい。マインドマップを用い、自己分析の重要性を述べている永井(2019)の主張とも重なるが、出来る限り大学在学中の早期に自己分析を取り入れた活動を行うことで、自己を顧みる時間を十分に取ることができ、自分の強みを早い時期に気づくことができるのではないだろうか。

また、Jさんが自分の強みを語る際、「少しの」日本語といった謙虚な発言が度々みられた。大学4年になるにつれ、Jさんの周りには、留学やワーキングホリデーなどで日本に滞在し、日本語能力が自分より高い友人が多くなった。そんな中、Jさんは友人と自分の日本語能力に差を感じていた。インタビューでは、彼は他者(友人)と自己を比較し、自己を低く評価しているように感じられた。大学時代に抱いたこのような自身に対する日本語能力の不安が就職活動に影響を与えたと考えられる。このことから、学習者自身に自らの日本語能力で何ができるかという肯定的な面を意識させるような日本語の授業の在り方を教師は追求する必要があると言えよう。

Bさんの場合、フォーラムでの自分を成長させたいと思う出会いが彼女のキャリアに大きく影響を与えた。このような出会いが早い段階であることは、自らのキャリアを考える際に有効であると考えられる。日本企業の就職活動を考えている韓国人大学生への就職指導として、守屋(2017)では、勤務歴の長い日系企業の社員をアドバイザーとして招請することも、学生の意識付けのために必要であるとしている。そのような例として、韓国の大学に日本企業で働く卒業生を招き、特別講義を行うなどの活動もある(나유정(ナユジョン)2019)。学生が企業人の話を聞くことの効果として、新居・赤井(2008)では、日本人大学生が日本企業のリーダーの講演を聞いた後、学生が就職するまでの時間をより有意義に過ごそうとポジティブな考えを持った可能性があるとしている。学生たちが就職活動を始める前に、学生と企業人が出会う機会を提供することも就職指導として必要であると言えよう。また、Bさんの語りから、友人の存在が彼女の就職活動を支えていたこともわかった。筆者らは大手企業に就職したBさんなのだから、就職活動は意欲的に行ったのだろうという構えがあったが、長引く就職活動にBさんは疲弊していた。そのような時に背中を

押してくれたのが、友人の励ましであった。Bさんが同じ大学生から刺激を受けたことから、既に内定をもらった先輩の話を聞いたり、学生同士でどのように就職準備や就職活動をしているかなど、情報共有したりすることも、キャリア形成につながるのではないかと考える。

5. 今後の課題

本稿は、協力者2名という対象者の少ない調査であったため、一般化することは難しい。しかし、調査を積み重ねていくことで、韓国の大学で行える就職支援の方法を模索できると考えられる。今後は対象者を増やすことで、より多様なキャリア形成について考察していきたい。また、今回は協力者2名とも日本滞在歴が1年に満たない状況での調査であった。今後、彼らのキャリアがどのように形成されていくのか長期的に調査していきたい。それにより、就職後のキャリア形成についても考えられるような指導・支援を模索する手がかりを見つけ出すことができるであろう。

【参考文献】

- ナユジョン(2019)「日本就職と大学の役割—ブサン外国語大学日本就職システムを中心に—」『日本語文学』84、pp.547-564
- 新居佳子・赤井誠生(2008)「産業界のリーダーたちによる授業が大学生の就職観に与える影響」『大阪大学大学教育実践センター紀要』4、pp.1-6
- 家根橋伸子(2018)「就職活動期にある地方小規模私立大学中国人女子留学生のキャリア意識—ライフストーリー・インタビューからの探索—」2018年日本語教育学会秋季大会予稿集、pp.136-141
- 古賀万紀子(2016)「日本就職をめざす韓国の大学生の自己分析における介入実践—日本語教育におけるキャリア教育の課題をめぐって—」『日本語教育研究』35、韓国日語教育学会、pp.25-41
- 桜井厚(2002)『インタビューの社会学ライフストーリーの聞き方』せりか書房、pp.7-45、pp.139-171、pp.210-245
- 角ゆりか・大田祥江(2015)「就職のための日本語授業における協働学習の活用—「自己分析」構築に着眼して—」『日本語教育研究』32、韓国日語教育学会、pp.119-136
- 中山亜紀子・佐藤正則(2014)「中国人女子学部留学生の留学動機と将来像」2014CAJLE Conference Proceedings、pp.85-93
- 永井亜紀(2019)「日本就職を目指す韓国人に対する指導法の考案—自己分析におけるマインドマップの活動—」『日語日文学』81、大韓日語日文学会、pp.21-39
- 久野弓枝(2015)「中国人編入留学生のライフストーリー研究(2)—進路決定要因に着目して—」『文化と言語』83、札幌大学外国語学部紀要、pp.41-52

三代純平(2016)「『グローバル人材』になるということ」『日本語教育学としてのライフストーリー』三代純平編、くろしお出版、pp.112-138

守屋美佐子(2017)「韓国の大学におけるビジネス日本語教育を考える」『국제언어문학』(国際言語文学)38、pp.223-241

安井知恵・宮前耕史(2008)「キャリア教育をめぐる日韓比較に関する一試論-啓明大学校日本語学科(韓国)「ビジネス日本」における実践から-」『岐阜女子大学紀要』38、岐阜女子大学、pp.83-94

聯合ニュース「ソウルできょうから海外就職博覧会日本企業115社参加」2019年5月31日(最終閲覧日:2019年8月7日)

法務省ホームページ「国籍・地域別 在留資格(在留目的)別 在留外国人」

http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html(最終閲覧日:2019年9月12日)

文部科学省の中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」(平成23年1月31日)

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf
(最終閲覧日:2019年9月12日)

논문투고일 : 2019년 12월 24일
심사개시일 : 2020년 01월 16일
1차 수정일 : 2020년 02월 05일
2차 수정일 : 2020년 02월 13일
게재확정일 : 2020년 02월 17일

日本で働く韓国の大学卒業者のキャリア形成に関する一考察

神野末翔子・石丸春奈

本稿では、今後多様化するであろう韓国大学生の就職活動の在り方を知るため、韓国の大学を卒業し、日本で就職を果たした韓国人2名を対象に、日本での就職に至るまでの経緯と、現在の状況、これからのキャリアプランについてインタビューを実施した。インタビューはライフストーリー研究法を用い、彼らのキャリアに大きく影響を与えた経験や考えを考察した。インタビューの結果、Jさんは「自分の強み」を挫折の中から見出し、就職活動の支えにしていた。Bさんは、「自分を成長させる出会い」が大きな転機となっていることがわかった。

就職活動を経て、社会人になった2名は、理想の社会人像を確立し、目標に向かって努力していた。彼らの語りから、韓国の大学ができる就職指導・支援として①早い時期で自己分析をすること、②学生が自身の日本語に自信を持てるような授業を追求すること、③自分を成長させる出会いの場を提供すること、④どのような社会人になりたいかといった具体的なキャリアを就業前に考えることが考えられる。

A study of career development for Korean people who works in Japan after graduated Korean universities

Kamino, Mikako · Ishimaru, Haruna

Two Korean people who works in Japanese companies after graduated from universities in Korea were interviewed under 3 main issues; 1.the back ground until they got the job 2.their present situation of living and working in Japan 3.their career plan in order to know about Job hunting of Korean university students, which is becoming more and more diversified.By using “Life story reserch method”, we examine how a person’s experience way of thinking affect their career.

In Mr.J’s case, he found out that his gained lessons from his own failure has become his strength, and it provided him with emotional support while he continue Job hunting.

In Ms B’s case, the experience that help to improve myself is the turning point of her life.

After their job hunting, they makes an effort to become a member of the society that they want to live in.Throught their life stories we suggest that Korean Universities should conduct job guidance and support for the students who desire to work in Japan.

1. Do self-analysys early. 2. Conduct Japanese classes which boost student’s self-confidence at their Japanese language ability. 3. Provide chances for students so that they can gain experience and improve themselves. 4. Provide orientation for students so that they can think about their future career and what kind of person they want to become as a member in the society before getting a job.